

## 黙ってICUの土壌を耕した人への感謝

並木 浩一



永田竹司教授  
最終講義にて

永田竹司教授は私にとっての牧師であり、たましいの看取り手である。そのような方として「永田先生」である。しかし他方では、かつて学会運営の苦労を共に背負い、一緒に研究旅行を繰り返した親しい同僚であった。そのような過去のいきさつからは、「永田さん」と呼ばせていただく。そうしないと別人になってしまう。

私は永田さんに負い目がある。ICUに着任早々の永田さんに、私は日本基督教学会再建期の会計実務というやっかいな仕事をお願い

し、何年もその任に当たっていただいた。永田さんは嫌な顔をせず、遂行して下さった。この時期は永田さんが博士論文の完成直後で、ご自分の学問の足場固めの大事な時期であった。その永田さんを学会の雑用に巻き込んでしまい、学問の継続の邪魔をしたことは確かである。それを思い起こして、感謝と共に慚愧の念に堪えない。

もともと、この学会の実務がなくても、永田さんは十分忙しかった。他の教員と違い、永田さんはまずICU教会の副牧師となった。複雑な業務

と牧会の仕事で手一杯の生活を強いられた。研究どころではない環境であった。

多少の曲折があったが、ICU教会の仕事、大学牧師に加えて、永田さんには人文科学科の専任教員、さらには比較文化研究科の担当教員の勤めが加わった。ICU教会の牧師と人文科学科の教員という二足、いや三足のわらじを履いての奮闘が続いた。その間に、永田さんは最愛の人の長い闘病生活を支え、辛く悲しい時期を経験した。しかし永田さんは何事もないような顔をしていた。温かい心とクールな姿勢。それが永田さんの特色で私などはとうてい真似ができないと思った。人生の悲しみが少しずつ過去になってから、永田さんは現在のすばらしいパートナーに恵まれた。本当によかった。永田さんと親しい誰もがそのことを喜んだ。

永田さんが背負ったご苦勞は当事者にしか分からないだろう。ICU教会の牧師職、大学牧師、その伴う説教や結婚式、突然に飛び込む教会員の不幸への対応、葬儀の司式、教会と大学の諸行事を遂行する。考えただけでも想像に余る。ご自分のことを優先できない。他者のために人生の時間を捧げなければならない。だが、永田さんからご自分の任務について愚痴を聞いたことがない。ICUのもっとも大事な、たましいの事柄、建学の理念である学生たちに対するキリスト教精神の伝達、これらはICUの土壤である。永田さんは任務を天職と心得てICUの土壤を黙々と耕してきた。

文字通り、黙々と、である。永田さんは寡黙である。と言っても永田さんはクラスでは大いに語り、教員のリトリートでは奨励を語り、教会では人を活かす言葉を語り続けてきた。魂に届く説教を永田さんは語った。どの説教にも人間に対する暖かな眼差しが感ぜられた。ときにはユーモアを交えての説教には力みがない。しかし永田さんが語る福音の言葉には説得力があった。また、会衆のための、会衆を代表しての司牧者の祈りは魂にしみいるものがあつた。

永田さんがアメリカでの学業を終えて帰国したとき、ICU教会の責任を負っていた古屋安雄教授・牧師（現在はICU名誉教授、ICU教会名誉牧

師)に、どこかに仕事がないかと訊ねたという。それを聞いた古屋さんは早速、ICUの大学礼拝での奨励を永田さんに頼んだ。永田さんは気負いのない奨励を語った。古屋さんから「並木君、どう思うかね」と聞かれた。私は即座に、「この人にはセンスがあります」と答えた。古屋さんは、たった一回、短い話を聞いただけで判断できるのかねと、不思議な顔をした。私には確信があった。福音の理解と人間感覚、大学人としてのセンスがあるかないかは、聖書の取り上げ方、語り方で分かるものである。

大学教員という人種は概しておしゃべりで、誰かの権威を引き合いに出したがる。永田さんが説教で学者の意見を引き合いに出したという記憶がない。自分が世界を知っていることを間接に誇るような説教や奨励も聞いたことはない。永田さんは説教でよく、新聞の小さな記事を取り上げた。「新聞は聖書の最良の注解である」。そう言ったのはカール・バルトであったが、たしかにそうだな、と思った。

この人にはおよそ権威主義が似合わない。そう言えば、永田さんが福音派の神学生の時に全国的な規模で大学紛争が起こり、それが永田さんの神学校をも巻き込んだとき、永田さんは神学校の権威的教育体質を激しく批判したとのことである。そのため永田さんは神学校ですっかり睨まれて日本にいられなくなり、卒業後、永田さんはアメリカの神学校に行くことになった。しかしそれで永田さんの才能は開花し、道が開けた。権威主義批判も悪くはないものだ。

永田さんはゴードン・コンウェル神学大学では相当の成績を収めたはずだ。そうでなければ、プリンストン神学大学には入学できなかったであろう。しかもこの神学大学で永田さんはPhDに進み、学位を取得した。文献学が異常に発達した新約聖書学の分野で、プリンストン大学のPhDを取得するのは容易でなかったはずである。フィリピの信徒への手紙2章6節以下に見られる、初期の教会に伝承された「キリスト讃歌」の分析的な研究で学位を取ったが、大変だったに違いない。

永田さんは博士論文を出版するために英語表現のネイティブチェックを

友人に依頼したが、その友人が大事な論文をなくしてしまったらしい。それで博論の出版は沙汰止みになってしまった。それで出版をあきらめるのは欲のない人だと思う。

永田さんに欲がないのは名誉とか業績の話で、好きなことに対する好奇心は別である。特に最新のメカには目が輝く人である。高校生時代にはバイクを飛ばしていたらしい。永田さんの性分では、バイクの分解と組み立てまでしていたのではなかろうか。

永田さんの好奇心や研究心は日本文化にも向けられていた。かつて中川秀恭前学長の主唱で始められた小さな研究会があった。メンバーはわずか6名（中川秀恭、古屋安雄、青木茂、八木誠一、並木浩一、永田竹司）。日本基督教学会の本部を支えた面々が中心であった。日本の伝統ある宗教施設に、秋学期と冬学期の間の短い休みを利用して、何度か現地に赴いては体験を重ねた。永田さんはこの研究旅行に毎回参加した。私には初回、高野山での三日間の体験は鮮烈であった。真田幸村ゆかりの蓮華定院での宿泊、氷を割っての洗面、朝のお勤めへの参加、うっそうとしたコウヤマキに覆われた墓所の雰囲気などは今も印象に深く刻まれている。出雲大社、奈良の仏教寺院の歴訪なども収穫があった。これらの一緒に出かけた研究旅行は、四半世紀を経た今では、なつかしい思い出となっている。この研究旅行を通して、永田さんはキリスト教宣教の課題と困難を認識したのではないかと思う。

永田さんは律儀で、私のつたない講演にも毎回出席して下さり、大きな励ましをいただいた。私は聞き手を多少は楽しませたのではないかと思うが、永田さんからお世辞を聞いたことがない。永田さんは人をけなさないが、またお世辞も言わない人である。寡黙な常識人であって、ことにICUでは貴重な存在であった。

その永田さんが教員職の定年を迎える。それと連動して、ICUのミニスターの職も離れることになる。もっとも、ICU教会とはこれまでと違ったかたちで関係なさるかも知れず、それを強く望む者であるが、そのことは

措いて、長年のICUの専任教員職から引退するこの機会を捉えて、これまでのご苦勞にねぎらいの言葉を差し上げたい。私は元ICU教員として、また現ICU教員として、永田さんのこれまでのご奉仕とご苦勞、私がいただいたお交わり、そしてわがたましいの看取りに心からの感謝を申し上げます。